社内連句会　第三〇〇回記念

連句のあゆみ

2012年9月28日　言語研究所　久住

年	事項
712	『古事記』成る。倭建命の問い「新治　筑波を過ぎて　幾夜か寝つる」に、御火焼の老人が「かがなべて　夜には九夜　日には十日を」と答える。のちに連歌の始まりとされ、連歌は「筑波の道」と呼ばれた。
8世紀	『万葉集』巻八、尼の上句「佐保川の水を堰き上げて植ゑし田を」に、大伴家持が下句「刈る早飯はひとりなるべし」を付ける。今に残る、最も古い短連歌とされる。
1356	二条良基、救済とともに連歌集『菟玖波集』を編む。翌年、勅撰集に准ぜられる。
1372	二条良基『応安新式』。連歌の式目（決まりごと）が定まる。
1463	心敬『ささめごと』。宗祇は、その教えを受けた一人。
1488	宗祇・肖柏・宗長『水無瀬三吟百韻』。百韻の手本とされる。
1495	宗祇ら『新撰菟玖波集』。
1524以後	山崎宗鑑『新撰犬筑波集』。笑いの連歌、俳諧の連歌が広まる。
1684	井原西鶴、住吉社にて一昼夜に二万三千五百句を独吟（矢数俳諧）。
1686	深川の芭蕉庵にて『蛙合』。第一番の左は「古池や蛙飛こむ水のおと」。
1691	去来・凡兆編『猿蓑』。芭蕉一門の歌仙を収める。
1893	正岡子規『芭蕉雑談』に「発句は文学なり、連俳は文学に非ず」。発句は、のちに「俳句」と呼ばれる。
1904	高浜虚子が、俳諧の連歌を「連句」と呼ぶことを提唱する。
1969	パリで、O・パス、J・ルボー、E・サングィネーティ、C・トムリンソンの四人が、四つの言語で連作『Renga』を巻く（1971年刊）。
1981	連句懇話会（のちの日本連句協会）が発足する。
2012	当社社内連句会、第三〇〇回。

※年は、成立・刊行の年。諸説あるものは、一般的なものによった。

連句史 1

712年 『古事記』中巻

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

かがなべて 夜には九夜 日には十日を

問いと答えて、一つの歌になる。片歌が二つ。

答えたのは、火を焚く老人である。夜の数と日の数を、取り違えずに答えている。

連句史 2

心敬(1406–1475) 宗祇の師

氷ばかり艶なるはなし。

『ひとりごと』

冬の池の、薄氷。

連句史　3

1893年　正岡子規『芭蕉雑談』(新聞「日本」に連載)

発句は文学なり、連俳は文学に非ず。

理由：連俳の尊ぶところは「変化」であり、変化は文学以外の分子である、とする。

数年後、子規は高浜虚子と歌仙を巻いている。

連句史 4

1969年3月30日～4月3日　パリ、ホテルの地下室

O. Paz (スペイン語)　J. Roubaud (フランス語)　E. Sanguineti (イタリア語)　C. Tomlinson (英語)

ソネット27篇　1971年、Gallimard刊

翻訳による創作、と評される。